

Vol. 145

CONTENTS

- 【コラム】 エージェンシー育成のための社会情動的アプローチ…山川 修
- 【解説】 ラーニングエコシステムとオープンバッジの夢—教育のサイロ化に挑む教育のオープン化—…堀 真寿美
- 【解説】 データビジュアライゼーションを用いた親しみやすいデータサイエンス教材の提案…吉田智子・金光安芸子・北村美穂子

基
般

COLUMN

エージェンシー育成のための社会情動的アプローチ

OECDが提唱しているラーニング・コンパス 2030 では、将来の教育が目指すビジョンを提示している。その中のキーワードとして、ウェルビーイングとエージェンシーがある。ウェルビーイングはより良く生きることであり、エージェンシーは世界をより良くするための主体性と考えられている。この2つを達成するための基礎の1つとして OECD では、社会情動的スキルを考えているが、これは、ウェルビーイングやエージェンシー形成のためには、自分の感情に翻弄されず、社会的に協力ができることが重要であることを考えれば、理解できるのではないだろうか。

この社会情動的スキルの育成は、これまでほとんど教育の中で取り扱われてこなかったが、同様の概念である、非認知能力、情動知能、SEL (Social and Emotional Learning) 等の考え方も含めて、現在は教育の世界でも次第に取り上げられるようになってきている。

筆者は、自律的学習者を育成するために社会情動的スキルを育成する点（社会情動的アプローチ）に注目し、

図-1 に示すモデルをもとに実践研究を進めてきた。

このモデルでは、社会情動的アプローチの大もとに「安心」があると仮定している。これは John Bowlby の愛着理論で言われている Secure Base に相当する。そしてその安心にアクセスするための入口として、「共感」「観想」「創話」の3つを考えている。これは、それぞれ OECD の社会情動的スキルの「他者との協働」「情動制御」「目標達成」に対応している。これらの要素が安心につながる裏付けの理論として、共感愛着理論、観想はポリヴェーガル理論、創話は存在論的安心を考えている。

筆者は現在この3つのアプローチが安心につながるかどうかを、実践（共感→対話、観想→マインドフルネス、創話→ライフデザイン・ポートフォリオ）を通して検証を行っているところである。社会情動的基盤の育成は現在までの教育において、そのノウハウの蓄積がまだまだできていない分野なので、こういった取り組みが、社会情動的基盤育成のメカニズムを明らかにし、ひいてはエージェンシーの育成につながっていくことを期待している。

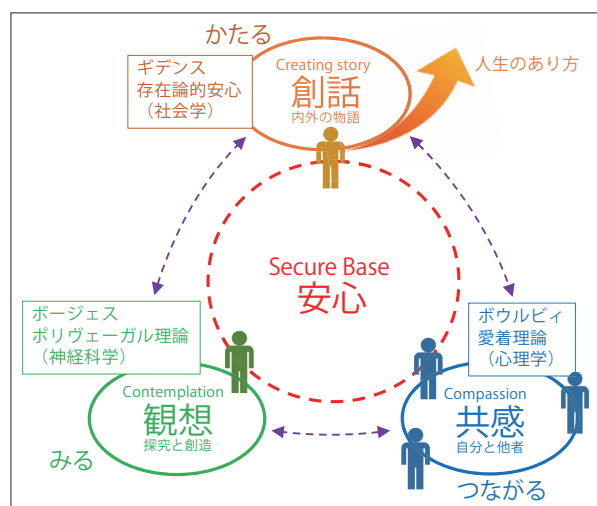


図-1 社会情動的アプローチのモデル



山川 修 (Safeology 研究所) safeology.lab@gmail.com

大学・大学院で物理学（素粒子・高エネルギー物理学）を専攻。高エネルギー物理学研究所を経て、日本ビジネスオートメーション（現、東芝情報システム）で人工知能の研究開発に従事。その後、福井県立短期大学、福井県立大学を経て、現在は Safeology 研究所代表。教育学、学習科学の分野で活動し、現在は、社会情動的スキルの育成が自律的学習者を育てることにつながるかどうかという研究を行っている。